ややこしい
ややこしい

～ハイキングと
ピクニック～

芳田尚哉

ハイキングとピクニック

「ええ見晴らしやな」
「そうですね」
　連れの男の言葉に若い男が頷く。
　二人の男の前には、まさに絶景と言って問題ない景色が広がっていた。
　遠くには山々が連なり、見下ろせば街がまるでミニチュア模型のように広がっている。
　比較的軽装で登れるこの山は、ちょっとした散歩コースにもなっている。
「たまにはこういうのもええですね」
「ほんまやな。ちょい疲れたけどな」
　男は山頂に設置された石のベンチに腰掛ける。座っても景色がいい。目線が低くなった分、また違った趣がある――のだが、男は特にそういう事は考えていなかった。
「さて、腹減ったな」
　男が若い男を見る。険しくはないが、それなりの道なので疲れるしお腹も空く。
「そうですね。それじゃ、下山しますか」
　ハイキングコースの小さな山なので、売店の類がない。
「なに言うとんねん。弁当はないんかい。ここで食わんでどないすんねん」
「そんなんありませんって」
「なんでやねん。弁当ないっておかしいやろ」
「おかしくないですって。兄さんがハイキングに行く言うたんやないですか」
「そうや。それがどないしたんや」
　男は不思議そうな顔をする。
「せやから、そんなん用意してませんって」
　若い男は、当たり前でしょ、という顔で答える。
「せやから、なんで用意しとらんねん。山の上で食う握り飯がええんやろが」
「それは確かにええですね」
「せやろ。せやったら、なんで用意しとらんねん」
「せやから、ハイキングや言うたからでしょ」
「せやからなんやねん。ハイキング言うたんやから、握り飯はいるやろ」
「それやったら、ピクニック言うてくださいよ。ピクニックやったら用意しますやんか」
「なんやピクニックって。お子ちゃまか、お前は。大人はハイキングやろ」
　男の言葉に若い男は首を傾げる。
「兄さん、なに言うてるんですか？」
「お前はわからんヤツやな。ピクニックちゅうんは、女子どもが言うもんやろ。男はクールにハイキングや」
「……」
　若い男は絶句する。

「クールって、なにがですか」
「ハイキングやハイキング。クールやろ」
「わけわかりませんって。なにがクールなんですか」
「お前にはわからんかな、このセンス」
「わかりませんね。わかりたくもないですし」
　若い男は冷たく言い放つ。
「とにかく腹減ったねん。弁当なしでハイキングって、どないやねん」
「せやから、ハイキングやから用意してないんですって。ハイキングは食事せぇへんのです」
「はぁ？　みんな山登ったら飯食うやろ」
「お弁当持ってですやろ。それはピクニックですねん。弁当持って行くのがピクニックで、純粋に山登りするだけなんがハイキングですねんって」
「なんやねん、それ」
「せやから、ちゃうもんなんですって。兄さんがハイキング言うたから、弁当は用意してないんですって」
「鬱陶しいこと言うなや。とにかく腹減ったんや、なんかないんか」
「せやからありませんって。下山しましょか」
「しゃぁないな。ほんま腹減ったわ」
「あ、塩飴やったらあります」
「そんなんいらんわ」
　そう言いつつ、若い男が差し出した飴を奪い口に放り込んだ。
「ちゃっかり食べるんですか」
「ええやろ。さっさと行くで」
「はいはい、わかりました」
　二人は景色もそこそこに下山するのだった。

　　Ｆｉｎｏ．

ややこしいややこしい～ハイキングとピクニック～

http://p.booklog.jp/book/110259

著者：芳田尚哉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/110259

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト